

明・呉嘉謨『孔子家語図』と明代の出版

楊, 文歆
九州大学研究生

<https://doi.org/10.15017/20557>

出版情報：中国文学論集. 40, pp.91-103, 2011-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



明・呉嘉謨『孔聖家語図』と明代の出版

楊 文 歡

一 はじめに——『孔聖家語図』の体裁

『孔聖家語図』全十一巻は明・呉嘉謨により収集及び注釈がなされたもので、明の万曆十七年（一五八九）に刊行された。その構成は、第一巻の前に、呉嘉謨「孔子家語図叙」、明・王鏊「孔聖家語図題辭」、明・王世貞「孔聖家語図叙」及び呉嘉謨「家語図凡例」が付されている。第一巻は図録で、四十幅の図とその説明及び按語である。第二巻から第十一巻は、『孔聖家語図』の取材源である『孔子家語』の本文を収め、図は無い。

『孔聖家語図』第一巻所収の四十幅図の内容については、次のとおりである。巻首に「先聖像」図、則ち孔子の図があり、「新都程起龍伯陽甫薰沐寫」「歛人黃組鐫」と題している。第二幅以降は、半葉に図、半葉に説明及び按語という版式で、縦20・8 cm、横13・5 cm、故事は全て先図後文の形式であり、図及び文は同一版面に印刷されている。四十幅の図中には、孔子の誕生から死去後までの主要な人生の軌跡が描かれている。「先聖像」図を除く故事を描いた図画には全て四字題が付されており、構図は均整がとれ、線條は簡潔である。「孔子家語図叙」^{〔1〕}には、
圖語皆道之寄也、統之不可廢置。家語固當與諸聖經並傳、而此圖所繪與語中所載大都相表裡、必合圖與語而大聖人之言動始全。

図と語とは皆道の寄するなり、之を統べて廢置すべからず。『家語』は固より当に諸聖經と並び伝ふべし、而して此の図の絵く所と語中に載する所とは大都相表裡たり、必ず図と語と合せて、而して大聖人の言動始めて全

きなり。

とあり、ここから、呉嘉謨自身が図像の効果を本文と同等に重視しており、後世の人々がこれらの挿絵によつて孔子の生涯における活動、言行举止を知ることができると考えていたことがわかる。

従来、『孔子聖跡図』に関する内外の研究は、正統九年（一四四四）に出版された張楷『聖跡図』を専ら主な対象としてきた。それは、明代において後に大量に出現した各種『聖跡図』の藍本としての張楷本の重要性に由るものである。一方、張楷本以外の『聖跡図』についてはあまり注目されていない。例えば呉嘉謨の『孔聖家語図』についても、重要な版本であるにも関わらず、これを専門的に研究した論考は極めて少ない。だが、張楷本以外の各種『聖跡図』についても、張楷本と同様に、詳細な検討がなされて然るべきであると筆者は考える。そこで本稿では、『孔聖家語図』巻一を研究の対象として取り上げ、まず先行する明・張楷『孔子聖跡図』の絵の構図と比較し、『孔聖家語図』における孔子の生涯を示す挿絵の特徴を分析する。また、『孔聖家語図』は明代の木版挿図の白眉として、その刊行が明代の出版業の繁栄と密接な関係を有していることを指摘する。

二、呉嘉謨について

呉嘉謨²、字は績可、湖北漢陽の人。その生没年は不詳である。明万曆三十五年（一六〇七）の進士（三甲五十六名）で、新建の県令、戸部主事、員外郎中、揚州知事に任じられる。『湖広通志』巻四十七（『四庫全書』所収）に伝記が見える。呉嘉謨、字績可、漢陽人、萬曆丁未進士。令新建、邑多盜、擒其渠魁、餘乃散。戊申大浸、買舟數十、遍歷諸村渡之、因請賑、請蠲、請改折、又請寬二百里長港禁、復築長豐圩隄以防水。擢戸部主事、管太倉、宿幣盡洗。遷員外郎中、出守揚州、以疾苦告歸。

呉嘉謨、字は績可、漢陽の人、萬曆丁未（一六〇七）の進士なり。新建に令たるに、邑に盜多し、其の渠魁を擒へれば、余は乃ち散ず。戊申（一六〇八）大浸あり、舟を買ふこと數十、諸村を遍歴して之を渡り、因りて賑を請ひ、蠲を請ひ、改折を請ひ、又二百里長の港禁を寬くし、復た長豐圩隄を築きて、以て水を防がんことを請

ふ。戸部主事に擢せられ、太倉を管り、宿幣盡く洗ぐ。員外郎中に遷り、出でて揚州に守たるも、疾苦を以て告帰す。

また、『孔聖家語図』の製作時の呉嘉謨の身分について、「孔子家語図叙」に次のように見える。

余患目弗獲赴戊子省試、養靜山房者數越月。

余目を患ひて戊子（一五八八）の省試に赴くを獲ず、山房に養靜するは數ふること月を越ゆ。

以上の記事から、『孔聖家語図』の製作年代は明の万曆十七年（一五八九）であることがわかる。また、ここには、呉嘉謨がその前年に目を患ったため、科挙の試験に参加できなかったことが述べられている。呉嘉謨は万曆三十五年（一六〇七）の進士であるから、『孔聖家語図』の製作時には、まだ進士に登第していなかったことが判明する。

三、『孔聖家語図』の刊刻について

まず『孔聖家語図』の画工については、その巻首に、「新都程起龍伯陽甫薰沐寫」と「歙人黄組鐫」という文字が刻されている。画工の程起龍は、字は伯陽、新都の人。新都は三国時代、呉の徽州の称であり、隋代には歙州、宋代以後は徽州府と称された。趙前『中国版本文化叢書——明本』³⁾には、程起龍の他の作品が記載されるが、その中に黄応瑞・黄応泰の両者が万曆三十年（一六〇二）に程起龍の画法に基づいて、『女範編』（古今女範とも呼ぶ）を製作し、その画法が細部に渉るまで非常に詳細であったことが述べられている（五七頁）。

刻工の黄組鐫もまた徽州の人である。李国慶『明代刊工姓名索引』⁴⁾には、黄組鐫が刻工として他の書物の刊行に参加した例として、万曆二十年（一五九二）新安で程榮によって刊行された『漢魏叢書』を挙げている。『漢魏叢書』は子目が三十八種、総計二五二巻で構成され、その刻法が非常に美麗であったために有名となった書物である。『漢魏叢書』の巻末には刊行に参加した刻工が列挙されているが、黄組鐫もその中の一人である（四五六頁）。

これらの画工、刻工の出身地から、呉嘉謨が率いる『孔聖家語図』の製作集団は、主に徽州出身者で構成されていたことがわかる。万曆年間是中国で急速に版画が発展した時代であり、この時、徽州の木刻家は重要な役割を果

たし、中国版画史上における多くの名作を製作した。その風格は「徽派」と称される。徽派は挿絵を版刻する技術に長けており、中国版画の発展に大きく貢献した。徽派の刻工はそれを生業とする工匠たちであったが、彼らは自分の仕事に誇りを持っており、その版画は、自分の描いた絵であれ、他人の描いた絵であれ、細部に至るまで極めて精巧で、一切手抜きが無い。特に、歙県剡村の黄氏一族は、典型的な「徽派」の風格を体現しており、その作風は他の流派へも大きな影響を与えた。明代は黄氏の刻工が最も活躍した時期であった。彼らの手に成る書籍は二百余种、刻工の数も三百人以上にのぼり、彼らはその優れた技術によって、各地で高い評価を受けた。⁵⁾ 明の胡應麟『少室山房筆叢』「経籍会通四」⁶⁾では、徽派の刻法に対して、以下に示すように非常に高い評価を与えている。

余所見當今刻本、蘇・常爲上、金陵次之、杭又次之。近湖刻・歙刻驟精、遂與蘇・常爭價。

余の見る所の当今の刻本は、蘇（州）・常（州）を上と爲し、金陵（南京）之に次ぎ、杭（州）又之に次ぐ。近ごろ湖（州）刻・歙（州）刻は驟精にして、遂に蘇（州）・常（州）と価を争ふ。

ここから、徽州の版画技術が急速に向上し、その結果、蘇州、常州と肩を並べたことがわかる。

また、『孔聖家語図』が杭州で出版されたことについては、「孔子家語図叙」に、「余目を患ひて戊子の省試に赴くを獲ず、山房に養静するは数ふること月を越ゆ」と記載されており、且つこの叙文の末尾に「武林後學」と署名がある。武林は杭州の別称であり、その名は武林山に由来する。叙文によれば、戊子の年（万曆十六年（一五八八））、呉嘉謨は眼疾のために科挙を受験することができず、数ヶ月の暇な期間中に、杭州に留まり静養する一方で、書物の閲読、整理を行うことができた。一年後の万曆十七年（一五八九）、呉嘉謨は杭州で『孔聖家語図』の注釈及び組織的刊行を行った。明代には、杭州・南京・蘇州・北京は、書籍出版の四大中心地であった。杭州の挿絵版刻の歴史は古く、呉嘉謨が『孔聖家語図』を刊行した万曆年間には、出版において既に全国的に重要な地域となっていたのである。そして、出版の経緯についても、「孔子家語図叙」に、

歲丁亥、余師澹所楊公捧冊魯藩過闕里、謁孔林獲所傳聖跡圖、歸而授余覽之……因取王氏藏本、按孔氏全書與楊師所授圖、考究其槩、或不無異同缺畧之差、余遂緝爲一書。圖按聖跡之遺、文仍王本之舊。

歲丁亥（一五八七）、余の師澹所楊公（『楊士經』魯藩を捧冊して闕里に過ぎるに、孔林に謁して伝ふる所の聖跡図

を獲、歸りて余に授けて之を覽せしむ。……因りて王氏（王鏊）の藏本を取るに、按ずるに孔氏の全書と楊師の授くる所の図と、其の概を考究するに、或いは異同欠略の差無くんばあらず、余遂に緝して一書と為す。図は按ずるに聖跡の遺にして、文は仍ち王本の旧なり。

とあり、『孔聖家語図』を出版するに当たり、呉嘉謨の師である楊士経が孔林から得た『聖跡図』を藍本とし、その後、王鏊所藏の魏・王肅注『孔子家語』十卷から本文を採り、両者を併せて一冊の本に編輯したことがわかる。また、出版の費用についても、呉嘉謨の書生という身分や、編纂に際して王鏊が藏書を提供し、序文も寄せていること、さらに王鏊の財力と名声等に鑑みれば、或いは王鏊による資金援助を受けたとも考えられる。当時の名士であつた王世貞が序文を寄せていることについても、王鏊の関与を想定しなければ考え難いと言わざるを得ない。呉嘉謨と王世貞の間には直接の接点が認められないが、王鏊と王世貞は共に江蘇の出身であり、且つ友人であつた。

四、張楷『孔子聖跡図』と呉嘉謨『孔聖家語図』の比較

張楷、字は式之、浙江慈溪の人。明永樂二十二年（一四二四）の進士科に第三甲で合格。明宣德二年（一四二七）に初めて仕官し、生涯の官途はほぼ順調であり、按察使僉事を任じられ、後に僉都御史になつた。彼は当時の宦官が政治を壟断している状況に対し、聖跡図を製作して、公正な官僚が儒教において正統であることを示そうとした。⁷⁴張楷の『聖跡図』は明の正統九年（一四四四）に刊行された。図は全三十八幅である。何廷瑞の増補を経て、明の弘治十年（一四九七）に刊行された。⁷⁵張楷本は二十九の故事を描いているが、何廷瑞は新しく九つの故事を加えた。⁷⁶鄭振鐸は「中国版画上、非常に貴重な作品である（在中國版畫史上是一部珍奇的大作品）」と称し、且つこの聖跡図は後世の諸聖跡図の藍本であることも指摘した。これらの事実に基づいた上で、以下、呉嘉謨の『孔聖家語図』と比較していく。

本稿では、張楷『孔子聖跡図』及び呉嘉謨『孔聖家語図』中より、それぞれ「禱嗣尼丘」「誕聖降祥」「天樂文符」「退脩授業」（図の名称は『孔聖家語図』に依る）の四幅の図（本稿末尾参照）を取り上げて比較する。なお、張楷『孔子

『聖跡図』は、曲阜文物管理委員会所蔵抄本『聖跡之図』（山東省曲阜市文物管理委員会影印、山東省友誼出版社、一九九九年）に拠る。

まず、孔子の一家が尼山で子宝を祈願した出来事を描く「禱嗣尼丘」図であるが、張楷本（図1）では、孔子の母には、一人の侍女と二人の侍童が、尼山で子宝を願う際に付き従っている。しかし、呉嘉謨本（図2）では、孔子の母に一人の侍女と一人の侍童が従っている情景が描かれており、さらに、新たな登場人物として、孔子の父である叔梁紇が加わる。これは、呉嘉謨本が他の聖跡図と大いに異なる点である。この変更について、呉嘉謨は自身が孔子関連の書物を研究して得たことと結びつけて、按語の中で「然婦人無專制、無獨遊境外之理。則謂父母俱禱者爲是（然るに婦人に専制無く、独り境外に遊ぶの理無ければ、則ち謂らく父母の俱に禱るは是爲り）」と述べる。当時の女性は一人では外出しないため、呉嘉謨は、孔子の母は夫の叔梁紇と一緒に祈願したと考えたのである。

次に、孔子がまもなく誕生する時に現れた瑞祥を描いた「誕聖降祥」の図に関して、張楷本（図3）では「有二龍繞室、五老降庭（二龍の室を繞り、五老の庭に降る有り）」という句を絵に表現する時に、二匹の動き回る龍を屋根の真上に描いており、さらに五人の老人が瑞雲に乗って絵の左側から飛来している。これは明らかに「降庭」という事実と合わない。一方、呉嘉謨本（図4）では、五人の老人が孔家の庭に配置されており、「すでに庭に降り立った」という形式に変わっている。張楷本に比べ、呉嘉謨本の描き方は本文の内容とより合致している。

さらに、孔子の母が孔子を出産した場面を描く「天樂文符」の図においては、張楷本（図5）は背景の描写を重視している。家屋を取り囲む塀や、中庭の周囲の情景は、とても詳細に表現されている。一方、呉嘉謨本（図6）の背景描写は簡潔である。しかし人物については却って詳細に描かれている。孔子の母は、我が子を見ながら微笑み、身体を少しベッドの頭の方にもたれさせ、その様子から彼女の疲労が窺える。最大の特徴は、生まれたばかりの孔子の胸に「制作定世符」という五文字が書かれている点である。この胸の五文字は張楷本には無い。

また、孔子が季氏の影響下にある魯で働くことを望まず、弟子の教育に専念したことを表現する「退脩授業」の図において、張楷本（図7）では孔子の弟子達が数多く集う、広大な場面を描いている。一方、呉嘉謨本（図8）は、細部の描写に工夫を凝らしている。孔子の人柄を表現するために、孔子の背後の庭園に君子の象徴である竹林を描

くことで、貞操を硬く守っていることを示している。

これらの比較分析を通して、以下のような特徴が浮かび上がってくる。

一 張楷『孔子聖跡図』について、そこに記される字句は二種類に分類することが可能である。則ち『史記』の孔子世家から引用した部分と張楷自身が詠んだ四言八句の賛詩からである。一方、呉嘉謨の『孔聖家語図』には賛詩が無く、呉嘉謨による「按語」が加えられている。これらの「按語」は呉嘉謨が孔子に関する書籍を大量に参照した上で書いたものばかりでなく、呉嘉謨自身の見解も含まれている。そのため字数は多くなり、内容も張本と比べ詳細になっている。

二 題材や人物等について表現内容上は大同小異であるが、その描き方に顕著な差違がある。呉嘉謨『孔聖家語図』は線描画の手法を採用しており、画面は簡潔で、構図は均整が取れており、その筆遣いは流麗で、彫り方は力強く、単純な輪郭ではなく、徽派の版刻の早期の特徴を体現している。しかし、具体的な人物の描き方では、背景はできる限り省略し、重要な人物については大きく描き出し、簡潔な刻法により重要な部分を強調している。図と文章との関係も密接であり、図に描かれる事象と叙述内容も概ね一致しており、そのため、図と文章とが意図する表現効果は最大限に発揮されている。

三 呉嘉謨『孔聖家語図』の按語と図像もまた単なる模倣ではなく、先行する張楷『孔子聖跡図』を踏襲した上で、それを更に発展させた表現となっている。

五、まとめ——呉嘉謨『孔聖家語図』と明代出版業の繁栄

明代の寛大な出版政策は、書籍の出版に対して良好な条件を提供した。明代において、官府の印刷と坊刻は繁栄を極めた。また、廉価な労働力による出版費用の低減もこのことに拍車をかけた。この点については、葉德輝『書林清話』に詳細な記述が見える¹⁾。呉嘉謨が『孔聖家語図』を組織的に刊行した時、彼はまだ進士の身分になく、「武林後学」を自称していた。一方、張楷等その他の聖跡図の製作指導者は士大夫であった。製作者の身分や立場のか

かる変化は、明代における出版業の繁栄にともない、より広い階層の人々が出版に携わることが出来るようになったことと関係している。

明代は中国における出版業の黄金期である。社会経済の発展にともなつて、個人の書物出版が大変盛んになつたばかりでなく、全国各地に多くの坊刻を行う書肆が出現し、いくつもの派閥が存在した。江南地方が出版の中心地で、特に、蘇州・杭州・南京・徽州は、江南の四大出版地であつた。その中で著名な絵画の流派に、建安派・武林派・金陵派・徽派がある。『孔聖家語図』は徽州の人、程起龍の手で描かれ、黄組鐫の手で彫られたものであり、徽派の早期の作品に属する。

明代中後期、小説や戯曲が市民文学の主流となつた。画家や刻工たちは戯曲や小説の内容に基づいて、大量の木版画を創作した。小説や戯曲の中には木版の挿絵が存分に活用されているが、このことは挿絵そのものの長所と大いに関係がある。挿絵は時間と空間の制限を受けず、事件の経過を直接的に読者に示すことができるため、読者に大変歓迎された。^⑬そして、万曆二十八年（一六〇〇）、金陵世徳堂刊『新刻出像官板大字西遊記』、崇禎年間武林起鳳館刊『南琵琶記』等の名作が出版されたのである。『孔聖家語図』は孔子の生涯の重要な事件を凝縮している、生き生きとした可視的な図画である。さらに、挿絵の活用は通俗小説や戯曲のみならず、儒教の書物にも用いられ、こうした現象から明代中後期における挿絵刻印業の繁栄を見てとることができる。呉嘉謨の『孔聖家語図』は、このように出版が隆盛を極めた万曆年間に印刷されたが、数多くの『孔子聖跡図』の中でも、小型で精巧であり（縦20・8 cm、横13・5 cm）、携帯しやすいという特徴を有している。これはおそらく呉嘉謨が財力に限りがある書生であつた頃の出版であることと関係があると考えられるが、この特色により、該書は却つて出版商の好評を得た。それは、出版にかかる費用が安く、大量発行に都合が良い上、携帯にも便利であつたためであろう。

呉嘉謨が組織的に刊行した『孔聖家語図』は彼自身の文化的素養と関係があり、同時に明代全体の出版業の繁栄とも直接的に関係すると考えられる。

『孔聖家語図』は後に日本に伝わり、高田円乘画『孔子行状図解』（寛政四年（一七九二）刊）にも翻刻されるが、両本の比較検討は別稿において行いたい。

注

- (1) 吳嘉謨『孔聖家語図』は『中国古代版画叢刊二編』（上海古籍出版社、一九九四年）所収万曆刊本を用いた。
- (2) 吳嘉謨及び彼の『孔聖家語図』については、許瑜翎「明吳嘉謨『孔聖家語図』版画研究」（『史物論壇』民国九十七年十二月第七期）のほか、Julia K. Murray, "The Temple of Confucius and Pictorial Biographies of the Sage", publish by Arithus Asia Publishers. 1996、同氏 "Illustrations of the life of Confucius", publish by The Association for Asian Studies. 1997 論文がある。
- (3) 江蘇古籍出版社、二〇〇三年。
- (4) 上海古籍出版社、一九九八年。
- (5) 方維保・汪応沢『中国文化遺珍・徽州卷 徽州古刻書』（遼寧人民出版社、二〇〇四年）六三頁、趙前『明代版刻図典』（文物出版社、二〇〇八年）四一頁を参照。
- (6) 上海書店出版社、二〇〇九年。
- (7) 張楷については、佐藤一好「張楷の生涯と詩作と『聖蹟図』」（大阪教育大学『学大國文』三四、一九九一年）、同氏『聖蹟図』の歴史（加地伸行『聖蹟図にみる孔子流浪の生涯と教え 孔子画伝』所収、集英社、一九九一年）、竹村則行「元・兪和『孔子聖蹟図』贊を踏襲した明・張楷『孔子聖蹟図』贊について」（九州大学人文科学研究院『文学研究』第一〇七輯、二〇一〇年）などを参照。
- (8) 前掲佐藤氏『聖蹟図』の歴史、加地氏著書、及び竹村氏論文を参照。
- (9) 前掲加地伸行『聖蹟図にみる孔子流浪の生涯と教え 孔子画伝』を参照。
- (10) 鄭振鐸『聖蹟図跋』、『鄭振鐸芸術考古文集』（文物出版社、一九八八年）所収。
- (11) 卷七「明時刻書工価之廉」の条を参照。
- (12) 『中国印刷史料選輯——歷代刻書概況』（印刷工業出版社、一九九一年）。
- (13) 徐小蛮・王福康『中国古代插图史』（上海古籍出版社、二〇〇七年）、七八頁。



图1 張楷『孔子聖跡圖』「尼山致禱」



图2 吳嘉謨『孔聖家語圖』「禱嗣尼丘」

周靈王之十九年實魯襄公之二十年戊申也是年
 孔叔梁紇與妻顏氏微在同禱於兗州尼丘山明年
 迺生孔子孔子首上圩頂象尼丘因名丘字仲尼或
 云字迺孔子年長時所取蓋不忘父母禱生之所自
 也

按新安陳氏云孔子父禱於尼丘山而生孔子故
 以為名若字是獨言父也家語曰孔子微在禱於
 尼山而生孔子是獨言母也然婦人無專制無獨
 遊境外之理則謂父母俱禱者為是



図3 張楷『孔子聖跡圖』「二龍五老」



図4 吳嘉謨『孔聖家語圖』「誕聖降祥」



图5 張楷『孔子聖跡圖』「鈞天降聖」



图6 吳嘉謨『孔聖家語圖』「天樂文符」



図7 張楷『孔子聖跡圖』「退修詩書」



図8 吳嘉謨『孔聖家語圖』「退脩授業」